

Title	蝉のうた：王沂孫「齊天樂」に見る亡国の「幽恨」
Sub Title	A cicada's song: Wang Yisun's grief over a fallen dynasty in "Qitianyue"
Author	村越, 貴代美(Murakoshi, Kiyomi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.4 (2011.) ,p.63- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	竹内良雄教授退休記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20110331-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蟬のうた

——王沂孫「齊天樂」に見る亡国の「幽恨」

村越 貴代美

はじめに

王沂孫（一二三〇？～一二九一？）、字は聖与、号は碧山・仲仙・玉笥山人、会稽（今の浙江省紹興）の人。宋末元初の詞人で、詠物詞にすぐれ、『花外集』（『碧山樂府』『玉笥山人詞集』ともいう）に詞を六十首ほど残している。周密（一二三二～一二九八）や張炎（一二四八～一三三〇？）らと交遊があり、互いに唱和の詞がある。張炎『詞源』で高く評価されている南宋の姜夔（字は堯章、号は白石道人、一一五五？～一二二一？）をよく学び、「白石の入室の弟子」（清・戈載『宋七家詞選』）とも評される。

「齊天樂」は五首残されており、うち二首が「蟬」を詠んだもの。「蟬」の二首は『樂府補題』にも収められている。『樂府補題』は南宋の滅亡を経験した詞人たちの唱和集で、王沂孫のほか周密・張炎等あわせて十四人の作品

を収める。彼らは集會を催し、共通の題を設けて互いに詞を作り合った。『樂府補題』には「蟬」のほか、「龍涎香」「白蓮」「蓴」「蟹」を詠んだ作品がある。

『樂府補題』は南宋の亡国の恨みを寄託した詠物詞集として、清朝の詞學者に高く評価されたが、中でも「蟬」を詠んだ作品は、作者八人が同じ出來事に託して詠んでいる点^①が特徴とされる。

そこで、「齊天樂 蟬」を読み直してそこに託されたイメージを明らかにし、『樂府補題』の成立に関する諸説を整理して詞會の狀況を確認して、宋末元初に生きた詞人たちが詞に託した思いを追ってみたい。王朝が交替するときに詞が果たした役割の一端を探ることになるだろう。

なお先行研究として、王沂孫の詠物詞については萩原正樹「王沂孫の詠物詞について」^①があり、王沂孫を含む宋末元初の詞人の詠物詞（『樂府補題』にも言及する）については松尾肇子「宋末元初の詠物詩——『詞源』を中心に」^②がある。王沂孫『花外集』には吳則虞による箋注^③があり、本稿では底本として吳則虞の校訂に従う。また『樂府補題』については、夏承燾「樂府補題考」^④、吳熊和「『樂府補題』跋」^⑤などがある。

一、詩語としての蟬と、王沂孫の詠んだ蟬

蟬には古代よりさまざまな詩的イメージが付与されており、王沂孫の「齊天樂 蟬」二首もそれらのイメージを踏まえて詠まれている。

古代から晩唐までの詩語としての蟬については、川合康三「蟬の詩に見る詩の轉變」^⑥があり、蟬の形の面白さ、とくにその羽の美しさ、長く地中で成長して、地上に出たのちはとても短命であること、など古代から蟬は注目さ

れていたが、詩においては、蝉が露しか口にしない清らかな生き物である（と考えられていた）こと、秋の時期に鳴くこと、の二点に蝉の特性は集約され、「高潔なるが故に虐げられる士大夫の悲哀」が蝉に重ね合わせて詠まれることが多かったという。中でも南北朝時代に北朝で作られたという蝉の詩は、本稿で扱おうとしているテーマと制作の状況が似ている。北周の武帝の建徳六年（五七七）、北斉を滅ぼして北方統一を果たした際に、北斉に仕えていた盧思道・顔延之・陽休之・李德林・薛道衡ら十八人が長安に移されて北周の官を授けられた。その時に、彼らの間で蝉の詩が作られ、いま顔之推の三十四句と盧思道の四十句が残っている。川合氏の紹介する盧思道「鳴蟬を聴く篇」は、蟬の哀しげな鳴き声から故郷への思いを募らせる痛切な詩である。

こうした唐末までの伝統的な蝉の詩的イメージを受け継ぎながら、王沂孫が「齊天樂 蟬」で詠ったのは、個人の悲哀に止まらない、王朝交代期に生きた詞人としての、亡んだ王朝への哀悼である。

其一

緑槐千樹西窓悄、厭厭昼眠驚起。

緑槐の千樹 西窓悄かなり、厭厭として昼眠驚き起く。

飲露身輕、吟風翅薄、半翦氷箋誰寄。

露を飲んで身軽く、風に吟じて翅薄く、半ば翦りし氷箋 誰にか寄せん。

淒涼倦耳。

淒涼 耳に倦む。

漫重扠琴糸、怕尋冠珥。

漫みだりに重ねて琴糸を払い、冠珥を尋ねるを怕る。

短夢深宮、向人猶自訴憔悴。

短く深宮に夢み、人に向いて猶お自ら憔悴を訴う。

残虹收尽過雨、晚来頻断続、都是秋意。

残虹收め尽し雨過り、晚来頻ば断続するは、都て是れ秋意。

病葉難留、織柯易老、空憶斜陽身世。

病葉留め難し、織柯老い易く、空しく斜陽の身世を憶う。

窓明月碎。

窓明るく月碎けり。

甚已絶余音、尚遺枯蛻。

甚ぞ已に余音絶ゆるに、尚お枯蛻を遺さん。

鬢影参差、断魂青鏡裏。

鬢影参差として、断魂す 青鏡の裏うち。

其二

一襟余恨宮魂断、年年翠陰庭樹。

一襟の余恨 宮魂断え、年年 翠陰き庭樹。

乍咽涼柯、還移暗葉、重把離愁深訴。

乍ち涼柯に咽び、還た暗葉に移り、重ねて離愁を把つて深く訴う。

西窓過雨。

西窓に雨過る。

怪瑤珮流空、玉箏調柱。

瑤珮空に流れ、玉箏柱を調うるかと怪しむ。

鏡暗妝殘、為誰嬌鬢尚如許。

鏡は暗く妝は残れ、誰が為にか嬌鬢尚お許の如くなる。

銅仙鉛淚似洗、歎移盤去遠、難貯零露。

銅仙の鉛淚洗うに似て、盤を移し去ること遠ければ、零露を貯め難きを歎ず。

病翼驚秋、枯形閱世、消得斜陽幾度。

病める翼は秋に驚き、枯れた形は世を閱し、斜陽を消ぎ得ること幾度ぞ。

余音更苦。

余音更に苦し。

甚独抱清高、頓成淒楚。

甚ぞ独り清高を抱き、頓に淒楚を成せるや。

謾想薰風、柳糸千万縷。

謾いたづらに想う 薰風に、柳糸 千万縷なるを。

この二首は、『樂府補題』では連作として載せられているのではないが、言葉の重複がきわめて多く、同じ情景を詠んだもの。樹のこずえの枯葉も止めようもなく散り落ちる秋の夕暮れ、通り雨があがったばかり、蟬が哀しげに鳴いている。西の部屋の窓辺で、その蟬の声に昼寝から目を覚ました女性が、すでに半ば抜け殻のようになっている命みじかい蟬と、鏡に映る鬢のほつれた自分の姿を重ね合わせて愁いに沈む。二首に共通する表現について□で印をして、上限二段に並べてみる。

其一

緑槐千樹 □西窓悄、厭厭昼眠驚起。

飲露身輕、吟風翅薄、半剪水箋誰寄。

凄涼倦耳。

漫重弘琴□、怕尋冠珥。

短夢深宮、向人猶自訴憔悴。

残虹收尽過雨、晚來頻斷続、都是秋意。

病葉難留、織柯易老、空憶斜陽身世。

窓明月碎。

其二

一襟余恨宮魂斷、年年翠陰庭樹。

乍咽涼柯、還移暗葉、重把離愁深訴。

西窓過雨。

怪瑤珮流空、玉笋調柱。

鏡暗妝殘、為誰嬌鬢尚如許。

銅仙鉛淚似洗、歎攜盤去遠、難貯零露。

病翼驚秋、枯形閱世、消得斜陽幾度。

奈音更苦。

甚已絶余音、尚遺枯蛻。

鬢影參差、斷魂青鏡裏。

甚独抱清高、頓成悽楚。

謾想薰風、柳糸千万縷。

典故が分かりやすいのは二首めの冒頭で、むかし斉の国の后が遺恨を抱いて死に、その魂が蝉に化して悲しく鳴いた、という故事が使われている。晋・崔豹『古今注』「問答釈義」に、「斉王の后、忿して死す。屍変じて蝉と為り、庭樹に登り嘒嘒して鳴く。王、悔恨す。故に世に蝉を名づけて斉女と為す」とある。蝉は宮中の人の靈魂が化したものとされ、「宮魂」が蝉を指すようになった。「嬌鬢」や一首めの「鬢影」は、両鬢をうすく蝉の羽のようにした「蟬鬢」と呼ばれる髪型。うすい羽からは、出すあてのない白い「氷箋」(詩箋)がイメージされる。全篇を通して「西窓」で愁いに沈む女性を描いた詞に見えるが、「銅仙の鉛涙」に別の寓意がこめられる。

「銅仙」は、漢の武帝により鑄造された承露盤を捧げもつ銅の仙人。後に承露盤を移そうとしたら、銅の仙人がはらはらと涙をこぼしたという。唐・李賀「金銅仙人、漢を辞するの歌 序」に、「魏の明帝の青龍元年八月、宮官に詔し、車を牽いて西のかた漢の孝武の捧露盤仙人を取らしめ、立てて前殿に置かんと欲す。宮官既に盤を拆く。仙人載せらるるに臨んで、乃ち漚然として涙下る」とある。「鉛涙」は、李賀のこの詩に「空將漢月出宮門、憶君清淚如鉛水(空しく漢月と將に宮門を出づれば、君を憶いて清淚は鉛水の如し)」とあり、銅の仙人の流すきらきらした玉の涙。通り雨があがつて、樹や枝葉に雨露がしたたる。露しか口にしないという蝉から、その露を受ける承露盤へイメージがつながる。甘露を受けるために漢の武帝が作った承露盤も、漢が減んで魏の時代になったら移設されることになり、涙など流すはずもない銅の仙人が玉の涙を流したという。しかし承露盤がなければ零れる露を受け止めることもできまいに、と。この李賀の典故は、会稽にあった南宋の陵墓が元人によって暴かれた事件を

指しているとされる。李賀の詩の首聯は「茂陵劉郎秋風客、夜聞馬嘶曉無跡（茂陵の劉郎、秋風の客、夜に馬の嘶くを聞くも曉には跡無し）」で、「茂陵」は漢の武帝の陵墓、「劉郎」は武帝（劉徹）をいう。

通り雨がやんで鳴き始めた蝉の声は、「琴」や「箏」の音に例えられている。それは蝉がまだ衰微していない「薰風」のころ、「千万縷なる」柳の「糸」とイメージがつながっており、絃の音かと思われる鳴き声が風に乗って連綿と聞こえてくる。一首め「冠珥」は髪飾りと首飾り。女性の装飾品であるが、「冠」はまた「蟬冠」のイメージを浮かべせる。「蟬冠」は漢代の侍従官が「蟬」の飾りと「貂尾」をはさんだ冠を身につけたことから、後に高官を指すようになった。「貂蟬冠」ともいう。そのような「冠」をしているのは誰であろうか。

後漢の蔡邕が酒食に招かれて隣人を訪ねたところ、屏の中から聞こえてきた琴の音に殺気を感じて、門から入らずに引き返した。驚いた主人が調べると、琴を弾いていた者が、「鳴いている蝉を蠅螂が狙っているのが目に入り、弾きながら蠅螂が蝉を獲り逃がすのではないかと心がざわついた、それが音に表れたのであろうか」と答えた。それを聞いて蔡邕はにっこり笑ったという。『後漢書』蔡邕伝に見えるエピソード。蔡邕は後漢末、漢室が衰微し宦官が跋扈した時代に生きた。経学の正しいテキストを伝えるために石経（熹平石経）を建てるなど儒学を究めたが、琴の能手としても知られていた。董卓政権下で重用され、文章家として次代の建安文学の担い手たる王粲・孔融らもそのサロンに集めて大きな影響を与えたが、董卓誅殺の動乱に巻き込まれて最期は獄中で死した人である。

二首め「珮」はもちろん、男子が身に帯びるものであり、君子が「行くときは則ち佩玉を鳴らす」と古く『礼記』に見える。風に乗って聞こえてきた蝉の鳴き声が、君子の鳴らす佩玉の音かと怪しまれた。やや唐突な比喻であるが、女性が独り待ちわびるのは「高潔であるが故に身の危うい君子」という、唐末までの蝉の詩的イメージがここに二重写しになって浮かび上がる。

二、『楽府補題』の成立

『楽府補題』に収録される詞は、五回の詞会で詠まれた計三十七首。場所は、宛委山房・浮翠山房・紫雲山房・余閑書院・天柱山房とある。作者として記されているのは、王沂孫・周密・王易簡・馮応瑞・唐芸孫・呂同老・李彭老・李居仁・陳恕可・唐珏・趙汝納・張炎・仇遠の十三人。作者名に字と号も記されているので、宛委山房が陳恕可の書齋、紫雲山房が呂同老の書齋、天柱山房が王易簡の書齋であることはすぐ分かる。浮翠山房はおそらく「瑤翠」の誤りで、唐芸孫の書齋であろう。王沂孫の号である「玉笥」は、会稽山にある峰の名。宛委山・天柱山は、玉笥山の別名。紫雲山も会稽山と同じく会稽県の東南にある（『会稽志』ほか）。つまり、詞会は越州（今の紹興）在住のメンバーが持ち回りでそれぞれの書齋を会場として開催され、亭主はその回の作品を残さない。作者名を記さない詞が二首あり、うち一首を『全宋詞』は李居仁の作とし、もう一首を夏承燾「楽府補題考」では王英孫で、余閑書院の主人ではないか、とする。作品を残さない参加者が他にもいたかも知れない。作品をまとめたのは陳恕可と仇遠の二人とされる。

毎回の詞会では、詞牌と題を決めて競作する。お題は「龍涎香」「白蓮」「蓴」「蟹」「蟬」の五つ。「龍涎香」は四季を通じてある物だが、詞の内容からは春に詠まれたものらしい。「白蓮」は夏、「蟬」「蓴」「蟹」は秋の風物である。夏承燾「楽府補題考」では、「龍涎香」「蓴」「蟹」は宋の皇帝を、「白蓮」「蟬」は皇后を、詠んだものとする。

詞会が越州で行われたことから、その開催の時期が推定される。楊璉真伽というチベット僧が元人を率いて南宋の六陵を暴くという事件があったのが元の至元十五年（＝宋の端宗の祥興元年＝一二七八年）十二月、翌十六年二

月に臨安から逃れていた宋室の一族が崖山で全滅して、南宋の滅亡が決定的となった。参加者の中で卒年の最も早いのが王沂孫で、至元二十八年（一二九一）には亡くなっていった（と占いで分かった）話を周密が『志雅堂雜鈔』に記している。そこで、至元十五年から二十八年の間に詞会が開催されたと考えられるが、この十数年間の早い時期に詞会があったとするのは夏承燾「樂府補題考」で、周密が至元十四年（一二七七）に弁陽の家が兵乱で焼かれて、妻の実家の楊氏の別荘のある杭州に居を定めたのが至元十九年（一二八二）、この間に越州に寄寓していた可能性があるという。

一方、この十数年間の遅い時期に詞会があったとするのは呉熊和「『樂府補題』跋」で、張炎（居は杭州）の詞集『山中白雲詞』巻一に「水龍吟 白蓮」があるが、『山中白雲詞』巻一の作品は「憶旧遊」から「三妹媚」までが至元二十七年・二十八年に元の大都に行った時の作、「甘州」から「憶旧遊」までが北行から帰って杭州や越州にいた時期の作。「甘州」から「憶旧遊」まで十四首のうち十首に越州での作と分かる序があり、張炎は至元二十年（一二九一）から至元三十年（一二九三）春まで越州に客居していた。「水龍吟 白蓮」は至元三十年春に杭州へ戻って作った「憶旧遊」の前に置かれている。このことから、詞会は張炎が越州にいた三年間の間に開催されたのではないか、また王沂孫は「蟹」の回だけ作品を残さないが、張炎と「水龍吟 白蓮」を作ったのが至元二十年の夏から秋の間で、「蟹」の回の際には亡くなっていたのではないかとする。張炎の「瑣窓寒」は、序に「王碧山、また中仙と号す、越人なり。文を能くし詞に工みで、琢語峭拔、白石の意度有るも、いま絶響す。余これを玉筍山に悼む」とあり、越州で王沂孫を悼んだ詞である。

王沂孫「淡黄柳」序に、至元十一年（一二七四）冬に杭州孤山で周密と別れ、翌十二年冬には会稽に遊びにきた周密と会ったことが記されており、また周密が至元二十三年（一二八六）に杭州の楊氏宅で宴集を開いた時には、

年表① 宋末元初の詞会と詞人の活動

南宋	元		
咸淳十年	至元十一年	1274	王沂孫、孤山で周密と別れる（「淡黄柳」序）。
徳祐元年	至元十二年	1275	王沂孫、会稽に遊びにきた周密と会う（「淡黄柳」序）。
景炎元年	至元十三年	1276	杭州、陥落。王沂孫、会稽でまた周密と会う（「淡黄柳」序）。
景炎二年	至元十四年	1277	周密、弁陽の家を焼かれる。
祥興元年	至元十五年	1278	十二月、元人、南宋の陵墓を盗掘（『輟耕録』、周広業「会稽六陵考」による）。張炎の六世の祖循王張俊の墓（無錫青山）もこの後盗掘される（康熙『常州府志』巻六）。
祥興二年	至元十六年	1279	元の世祖、中国を統一。南宋滅亡。この年に詞会？
	至元十七年	1280	
	至元十八年	1281	
	至元十九年	1282	周密、杭州の楊氏（妻の実家）別荘に居を定める。
	至元二十年	1283	
	至元二十一年	1284	
	至元二十二年	1285	
	至元二十三年	1286	周密、杭州の楊氏（妻の実家）で宴集を開き、王沂孫も参加。周密『絶妙好詞』成立？、自作の一首以外の補題詞なし。
	至元二十四年	1287	
	至元二十五年	1288	周密『癸辛雜識後集』、宋陵発掘のこと。張炎と王沂孫、山陰（紹興）で舟遊び（張炎「湘月」序）
	至元二十六年	1289	
	至元二十七年	1290	張炎、北行。陳恕可、杭州の西湖書院山長。
	至元二十八年	1291	張炎、北行より帰り、越州に。王沂孫、卒す？ 周密『志雅堂雜鈔』に占いで王沂孫が冥司にいると出た記事。周密『絶妙好詞』編纂？ 張炎「甘州」序に「餞草窓西帰」とある。「草窓西帰」は周密が杭州から故郷の湖州へ戻り終の棲家「復庵」を築いたこと。
	至元二十九年	1292	
	至元三十年	1293	張炎、杭州へ。
	至元三十一年	1294	
	元貞元年	1295	
	元貞二年	1296	
	大徳元年	1297	
	大徳二年	1298	周密、卒す？

王沂孫も参加している（載表元「楊氏池堂讌集詩序」）。杭州と越州の間を互に行き来しながら詞を応酬していた様子が分かるが、越州での詞会に張炎が一回だけの参加、周密は三回参加ということを見ると、夏承燾の説のほうが妥当かも知れない。杭州楊氏宅で宴集を開いた至元二十三年前後に成立したとされる周密の『絕妙好詞』には、自身の「水龍吟 白蓮」を載せる（この一首のみで、他の『樂府補題』所収の三十六首は載せない）。一方、張炎の『山中白雲詞』は張炎の生前に編纂された詞集で、越州での詞会にも参加している仇遠が序を付けている（『山中白雲詞』で制作年が分かるもつとも遅い作品は「臨江仙」の延祐元年（一三一四年）が、王沂孫を悼んだ「瑣窓寒」が「水龍吟 白蓮」より前に置かれていて、厳密な編年ではない（「白蓮」の回の詞会では、王沂孫も張炎と一緒に詞を作っている）からである。

以上を踏まえて、松尾肇子「宋末元初の詠物詩——『詞源』を中心に」中の表に少し補足して『樂府補題』所収の作品についてまとめると、次頁の表のようになる。

三、「蟬」の詠物と寄託

「齊天樂」を詞牌とし「蟬」を題とした回では、八人が十首の詞を残している。王沂孫の二首を含めて八人の十首を『樂府補題』の掲載順に並べてみる。共通するモチーフの主なものを□で囲む（李賀の典故はさらに網がけで示す）。

呂同老

表 『楽府補題』 の作品

時期	至元十六年（一二七九）？					
場所	宛委山房	浮翠山房	紫雲山房	余閑書院	天柱山房	
詞牌	天香	水龍吟	摸魚兒	齊天樂	柱枝香	
題	龍涎香	白蓮	蓴	蟬	蟹	
季節	春	夏	秋	秋	秋	
寄託？	宋の皇帝	皇后	皇帝	皇后	皇帝	
参加者名						作品数
王沂孫	1首	2首	1首	2首	没後？	6首
周密	1首	1首*		1首		3首
王易簡	1首	1首	1首	1首	亭主	4首
馮応瑞	1首					1首
唐芸孫	1首	亭主？		1首	1首	3首
呂同老	1首	1首	亭主	1首	1首	4首
李彭老	1首		1首			2首
李居仁	1首	1首				2首
陳恕可（編者？）	亭主	1首		2首	1首	4首
唐珏		1首	1首	1首	1首	4首
趙汝納		1首				1首
張炎		1首※				1首
王英孫？			1首	亭主		1首
仇遠（編者？）				1首		1首
作品数	8首	10首	5首	10首	4首	37首

* = 周密『絶妙好詞』所収 ※ = 張炎『山中白雲詞』所収

綠陰初蔽林塘路，淒淒乍流清韻。倦咽高槐，驚嘶別柳，還憶當時曾聽。西窓夢醒。歎絃絕重調，珥空難整。綽約冰綃，夜深誰念露華冷。不知身世易老，一聲聲斷統，頻報秋信。墜葉山明，疏枝月小，惆悵齊姬薄幸。余音未盡。早枯翼飛仙，暗嗟殘景。見洗冰奩，怕翻又翠鬢。

王易簡

翠雲深鎖齊姬恨，織柯暗翻水羽。錦瑟重調，綃衣乍著，聊飲人間風露。相逢甚處。記槐影初涼，柳陰新雨。聽尺殘聲，為誰驚起又飛去。商量秋信最早。晚來吟未徹，卻是懷楚。斷韻還連，余悲似咽，欲和愁邊佳句。幽期誰語。怕寒葉凋零，蛻痕塵土。古木斜暉，向人懷抱苦。

王沂孫

綠槐千樹西窓悄，厭厭昼眠驚起。飲露身輕，吟風翅薄，半翦水箋誰寄。淒涼倦耳。漫重拈琴，怕尋冠珥。短夢深宮，向人猶自訴憔悴。殘虹收盡過雨，晚來頻斷統，都是秋意。病葉難留，織柯易老，空憶斜陽身世。窓明月碎。甚已絕余音，尚遺枯蛻。鬢影參差，斷魂青鏡裏。

周密

槐薰忽送清商怨，依稀正聞還歇。故苑愁深，危弦調苦，前夢蛻痕枯葉。傷情念別。是幾度斜陽，幾回殘月。轉眼西風，一襟幽恨向誰說。輕鬢猶記動影，翠蛾心妬我，雙鬢如雪。枝冷頻移，葉疏猶抱，孤負好秋時節。淒淒切切。漸迤邐黃昏，砌蛩相接。露洗余悲，暮煙聲更咽。

陳恕可

碧柯搖曳聲何許，陰陰晚涼庭院。露濕身輕，風生翅薄，昨夜綃衣初剪。琴糸宛轉。弄幾曲新聲，幾番淒惋。過雨高槐，為渠一洗故宮怨。清虛襟度漫與，向人低訴處，幽思無限。敗葉枯形，殘陽絕響，消得西風腸斷。塵情已倦。

任翻鬢雲寒、綴貂金淺。蛻羽難留、頓覺仙夢遠。

唐珏

鬢痕初染仙萼露、新声又移涼影。佩玉流空、綃衣剪霧、幾度槐昏柳暝。幽窓睡醒。奈欲斷還連、不堪重聽。怨結
齊姬、故宮煙樹翠陰冷。當時旧情在否、晚妝清鏡裏、猶記嬌鬢。乱咽頻驚、余悲漸杳、搖曳風枝未定。秋期話
尽。又抱葉淒淒、暮寒山靜。付与孤蛩。苦吟清夜永。

唐芸孫

柳風微扇閒池閣、深林翠陰人靜。漸理琴_六、誰調金奏、淒咽流空清韻。虹明雨潤。正乍集庭柯、凭闌新聽。午夢驚
回、有人嬌困酒初醒。西軒晚涼又嫩。向枝頭占得、銀露行頃。蛻剪花輕、羽翻紙薄、老去易驚秋信。殘声送暝。
恨秦樹斜陽、暗催光景。淡月疏桐、半窓留鬢影。

陳恕可

蛻仙飛佩流空遠、珊珊数声林杪。薄暑眠輕、濃陰聽久、勾引淒涼多少。長吟未了。想猶怯高寒、又移深窈。与整
綃衣、滿身風露正清曉。微薰庭院昼永、那回曾記得、如訴幽抱。斷響難尋、余悲独省、葉底還驚秋早。齊宮路
杳。歎往事魂消、夜闌人悄。謾省輕盈、粉奩双鬢好。

仇遠

夕陽門巷荒城曲、清間早鳴秋樹。薄剪綃衣、涼生鬢影、独飲天边風露。朝朝暮暮。奈一度淒吟、一番悽楚。尚有殘
声、驀然飛過別枝去。齊宮在事謾省、行人猶与說、當時齊女。雨歇空山、月籠古柳、仿佛旧曾聽處。離情正苦。
甚懶拈箋、倦拈琴譜。滿地霜紅、淺莎尋蛻羽。

王沂孫

一襟余恨宮魂斷、年年翠陰庭樹。乍咽涼柯、還移暗葉、重把離愁深訴。西窓過雨。怪瑤珮流空、玉箏調柱。鏡暗妝殘、為誰嬌鬢尚如許。

甚独抱清高、頓成凄楚。謾想薰風、柳糸千萬縷。

柳や槐の樹、その細い枝、雨あがり、秋の昼下がりから夕暮れ、西窓の女性、鳴きだした蝉の哀しげな声、それは絃の音のように連綿と続き、蟬の羽は朽ちかけ、抜け殻が塵にまみれる、といった同じ情景を「枯」「冷」「凄」など共通する言葉を使いながら詠んでいる。言葉だけでなく典故の重複も多いのは『樂府補題』の大きな特徴であって、詞牌と題を決め、典故もあえて他の参加者と同じものを使うことによって、詞作の技量を競ったのかも知れない。

典故として共通して使われているのは、斉の王妃の故事。周密『癸辛雜識』に、盗掘された孟后陵で長さ六尺余の紺碧の鬢を拾った村の老人の話が記録されており、「蟬」の十首のうち九首に「鬢」や「髻」の言葉が使われていることから、夏承燾の説に沿って呉則虞『花外集』箋注はこの「蟬」十首を、皇后の陵墓盗掘に対する寄託の作品とする。

陵墓を想起させる李賀「金銅仙人漢を辞するの歌」の銅の仙人の典故は、「蟬」の回では王沂孫の二首め（十首の最後）と周密・唐珏の詞で使われている。王沂孫はこの典故を「龍涎香」と「白蓮」の回でも使っていて、「天香 龍涎香」は『樂府補題』全三十七首の第一首として載せられている。唐珏は「龍涎香」の回には参加していないが、周密は参加して李賀の典故を使い、王沂孫に続いて『樂府補題』全三十七首の第二首として載せられている。唐珏は「白蓮」の回でも李賀の典故を用いており、またこの回には周密と張先も参加して、いずれも李賀の典故を

使っている。

『楽府補題』が宋陵盜掘事件に寄託した作品集であるという見方は、清の常州派詞人によって定着した。厲鶚（二六九二—一七五二）は「論詞絶句」十二首の第六首に、

白頭遺民涕不禁、
白頭の遺民 涕を禁じず、

補題風物在山陰。
補題の風物 山陰に在り。

残蟬身世香蓴興、
残蟬の身世 香蓴興る、

一片冬青塚畔心。
一片の冬青 塚畔の心。

と詠った。「冬青」は、唐珣が宋陵盜掘事件を知って、林景熙や謝翱とともに藥草を採取すると称して密かに散らばった遺骸を集めて埋め、目印に「冬青樹」を植えたことを指す。「残蟬」はもちろん、宋朝滅亡後の時代を生きる詞人たちを指すであろう。

厲鶚は宋末の詞人を「遺民」と呼び、後に『四庫全書』に著録される際に『楽府補題』も「宋末遺民、唱和の作」と提要に記されるが、宋末元初の詞人たちが清朝のような「遺民」、さらには遺民と対立する生き方をして二朝に仕えた人を指す「弑民」という概念を持っていなかったことは、村上哲見「弑民と遺民——宋末元初江南文人の亡国体験¹⁰⁾」で論じられている。だが、清朝の常州派の詞人には宋陵盜掘に寄託して宋朝の滅亡を嘆じた作品集として『楽府補題』は読まれ、清末の陳廷焯は『白雨齋詞話』で、「王碧山の詞、品は最も高く、味は最も厚し。意境最も深く、力量最も重し。時に感じ世を傷むの言にして、出すに纏綿たる忠愛を以てす。詩中の曹子建、杜子美なり」と、王沂孫を曹植・杜甫に比肩させるまでに至る¹¹⁾。ここに見える「忠愛」という価値基準は、民国以降の詞学研究でも受け継がれ、『楽府補題考』で宋陵盜掘事件との関係が改めて取り上げられ、呉則虞もその説に

従いながら『花外集』に箋注をほどこした。

近年になって宋陵盗掘事件との関係に疑問を呈する研究も始めているが、『樂府補題』の作品すべてが陵墓盗掘に寄託して詠んだものであるかどうかは、夏承燾の「樂府補題考」発表後に疑問が呈されたようで、『樂府補題』に最初に載せられる王沂孫「天香 龍涎香」は崖山で宋室が滅亡したことを詠っているのではないか、との呉則虞らの説を夏承燾も「後記」を付して一部認めている。

詞会の参加者には、いまでは『樂府補題』所収の作品しか伝わっていない人もいる。そうした中で周密は、詞人として多くの詞を残しただけでなく、『絶妙好詞』のような詞選を編纂したり、『武林旧事』『齊東野語』『癸辛雜識』『浩然齋雅談』等たくさんの筆記を残して当時伝聞した事柄を書き留めている。そこで周密の著作を中心に当時の詞会や陵墓盗掘事件との関係を再検討し、近年の『樂府補題』寄託説を疑問とする研究をうながしたのは、肖鵬『樂府補題』寄託發微——与夏承燾先生商榷⁽¹²⁾だっただけかと思ふ。ただ、盗掘事件に言及している『癸辛雜識』は断続的に編纂されていて、「近ごろ楊髡諸陵を盗み、二陵の梓宮内、略ぼ有る所無し」と記録された『癸辛雜識後集』が成立したのが至元二十五年（一二八八）頃、「楊髡發陵の事、人皆これを知るも、能く其の詳を知ることなし。余、偶^{なま}ま当時の其の徒の互告状一紙を録し得て、庶^ほぼ其の首尾を知るべし」と記録された『癸辛雜識統集』が成立したのが至元二十六年（一二八九）から二十九年（一二九二）、肖鵬はこれを以て詞会が開催された時に周密はか参加者たちは盗掘事件を知らなかったし、そのために彼らの作品も事件に寄託した詞ではない、とするが如何であらうか。肖鵬は夏承燾が「胡僧の殘行、殆ど諸詞人の目撃する所と為る」と記した「目撃」を文字どおりに解釈しすぎているし、唐珏も参加した「白蓮」の回を初回だった可能性があるとされているが、『樂府補題』の編者ともされる陳恕可が「龍涎香」の回の亭主だったことを見過^すごしている。仮に「白蓮」の回が初回だったとしても、陳

恕可も「白蓮」の回では李賀の典故を用いて、「楽府補題」巻頭の王沂孫や周密の詞と呼応するのである。『楽府補題』には確かに編纂の経緯を記した序もないし、この集会について参加者が言及した記録も見えないが、その作品の配列を改める根拠もまた当時の資料に見当たらない。作品の分類や配列は、それ自身が編者の編纂の意図を具現するものである。

会稽にあった宋の陵墓が荒らされた、その詳細についてはうかがい知れなかったにしても、会稽在住の詞人がこれより前に詞会を開いた記録もないのであるから、盗掘の事件を契機に集会を開いて滅びゆく王朝への哀悼の作品を残したと考える⁽¹³⁾と思う。ただしこの活動を、宋朝への忠義と元朝への抵抗とする評価は、清朝になって付与されたものである。

四、清初の『楽府補題』発見

『楽府補題』は元明時代には埋もれていて、清の康熙十七年（一六七八）に朱彝尊が常熟の呉氏のところで見ると、汪森が購入して都に持ち帰り、蒋景祁の出資で刊刻（康熙十八年から二十年）したことから広く知られるようになった。朱彝尊と陳維崧が序を付している。常州派の厲鶚が生まれるより前のことである。一六六二年に永明王が殺されて明が滅び、康熙帝が即位したものの、康熙十二年（一六七三）には南方で呉三桂ら三蕃の乱が起こり、平定するのに康熙二十年（一六八一）までかかっている。清朝の支配がまだ不安定な要素を持っていた時期で、康熙二年（一六六三）には清朝支配に対する批判を禁じる「文字の獄」もあった。

清初の『楽府補題』刊行に当たって寄せられた序をみると、陳維崧が「嗟矣^あ、此れ皆な趙宋の遺民の作なり」と

して、この頃からすでに「遺民」としての立場から「微詞を援きて志を通じ、小令に倚せて以て声を成す」と詞を一種の「抵抗の道具」として『楽府補題』の諸作品を読んでいたのに対し、朱彝尊は「其の詞を誦めば以て志意の存する所を觀るべし。山林友朋の娛しみ有り」と雖も、身世の感も別に凄然言外なる者有り。其れ騷人の『橘頌』の遺音か」と、やや抑えたトーンでその「憂国の情」を汲み取っている。二人が『楽府補題』を真似て作った詞にも、そうした態度の違いが現れている、という指摘がある。¹⁴

朱彝尊と『楽府補題』の関係については、朱彝尊が康熙十八年（一六七九）、五十歳の時に京師での博学宏詞試に応じたのを機に、都で知り合った人士と『楽府補題』を真似た唱和詞の応酬活動を展開し、数年のうちに『詞綜』を編纂したり、南宋詞人の詞集を探して張炎の『山中白雲詞』や『絶妙好詞』を発見して刊刻するなどの活動が知られている。

朱彝尊が生まれたのは、明の崇禎二年（一六二九）、明が滅んだときは十六歳だった。若い頃は義勇軍に参加して敗退したり、同志と連絡して「抗清復明」の秘密活動に参加して清朝に対する不満の詩詞をたくさん作ったとか、¹⁵逆に、家は貧しく布衣の詞客として江南を漫遊し、南宋の姜夔と似た生き方をした、¹⁶と評されている。

『全清詞（順康卷）』から朱彝尊の「擬補題」活動に参加した詞人とその作品を拾うと、順治十七年（一六六〇）に文人の結社を禁じる政策がとられたにも関わらず、計四十人、百三十七首が確認できるといい、宋末元初の詞会より規模が一回り大きい。このような大規模な活動を指導していたわりには、朱彝尊が「擬補題」詞として残している七首の作品のいずれも抑え気味なトーンは、やや意外である。たとえば「台城路 蟬」二首の第二首（「台城路」は「齐天楽」の別称）は、王沂孫たちの十首の「蟬」の詞と同じく雨上がりの秋の夕暮れを詠んでいる。

脱余不作遊仙夢、炎天愛浮涼吹。抱柳眠慵、棲槐影合、随分小園堪寄。綠陰滿地。慣獨自悠颺、一糸風裏。咽

年表② 清初の詞人と『楽府補題』

清		
崇禎二年	1629	朱彝尊、生まれる。
：		
順治十五年	1658	朱彝尊、このころ反清の秘密活動に参加。
順治十六年	1659	
順治十七年	1660	文人の結社を禁じる。
：		
康熙十七年	1678	朱彝尊、『楽府補題』抄本を見る。『詞綜』三十巻。
康熙十八年	1679	春三月、博学宏詞の試験。応募一四三人（一説に一五四人）、採用五十人、『明史』編纂させる。「擬補題」活動、この年から。
康熙十九年	1680	十八年から二十年、『楽府補題』刊刻。
康熙二十年	1681	『山中白雲詞』重刻、『浙西六家詞』を附す。
康熙二十一年	1682	
康熙二十二年	1683	
康熙二十三年	1684	浙西詞派の柯煜、周密『絶妙好詞』抄本を発見、重刻。
康熙二十四年	1685	
康熙二十五年	1686	
康熙二十六年	1687	
康熙二十七年	1688	
康熙二十八年	1689	
康熙二十九年	1690	
康熙三十年	1691	汪森ら増訂『詞綜』三十六巻。
康熙三十一年	1692	厲鶚、生まれる。～1752。
：		
乾隆十三年	1748	厲鶚、査為仁の『絶妙好詞』箋注を知り、手伝う。
：		
乾隆十五年	1750	査為仁・厲鶚『絶妙好詞箋』。

住残声、哀吟又聽別枝起。柴門乱暄雨後、湿雲斜照、落霞斷魚尾。南陌離亭、西風故園、多少愁人盈耳。

兒童此際。買蛛網檐牙、筠竿樹底。為恁驚飛、絳桐移素指。

朱彝尊はこのような詠物詞をいくつも残しているが、明末清初の詞の再興に『樂府補題』の発見や「擬補題」活動がどのように関わるのかは、今後の課題としたい。

まとめ

唐代までに形成された詩語としての「蟬」は、蟬が露しか口にしない清らかな生き物であると考えられていたこと、また地中で長く成長して美しい羽を持って地上に現れながら秋の短い時を鳴いて終わるその姿から、「高潔な」が故に虐げられる士大夫の悲哀を重ね合わせて詠まれることが多かった。それに対して宋末元初の亡国の悲哀を体験した王沂孫の「齊天樂 蟬」の詞は、王朝交代による移設で承露盤を支え持つ銅の仙人が涙を流したと詠った李賀の典故や、遺恨を抱いて死後に魂が蟬と化した齊の王后の典故を使いながら、滅びゆく宋朝への哀悼と、亡国後もたとえ朽ちかけた蟬のような身になろうとも高潔に生きていこうとする自らの姿を、二重写しにしながら詠った。

王沂孫たちが会稽で五回の詞会を持ったのは、会稽の宋陵が元人に暴かれて、臨安から逃れていた宋室の一族も崖山で全滅し、南宋の滅亡が決定的となった元の至元十六年（＝宋の端宗の祥興二年＝一二七九年）と考えられる。参加者の中で年少の二人が、作品を『樂府補題』にまとめた、とされる。

「蟬」の回では、王沂孫の二首を含めて八人の十首が残されている。共通して使われているのは齊の王妃の典故

だが、『楽府補題』の特徴としてメンバーが共通する言葉や典故を使いながら競作している形跡がみえる。王沂孫以外にも陵墓についてイメージを想起させる李賀の典故を使っている詞人はいて、とくに唐珏は宋陵盗掘事件を知って密かに葉草を採取すると称して散らばった遺骸を集めて埋めたとされる人、また周密は大量に残した筆記類に宋陵のことを断続的に書き記している人である。『楽府補題』の巻頭に収められる詞にも李賀の典故は使われており、会稽在住の詞人たちは宋陵盗掘事件を知った悲嘆から詞会を開催したとする清の常州派以来の見方は、妥当であると思われる。

常州派よりも早く、元明時代にはほとんど知られることのなかった『楽府補題』の抄本を見つけ、刊刻して広めたのは朱彝尊である。当時、朱彝尊はすでに五十歳、康熙十八年（一六七九）に京師での博学宏詞試に応じたのを機に、都で知り合った人士と『楽府補題』を真似た唱和詞の応酬活動を展開し、数年のうちに『詞綜』を編纂したり、南宋詞人の詞集を探して張炎の『山中白雲詞』や『絕妙好詞』を発見して刊刻するなどの活動も展開している。康熙十八年の博学宏詞試の実施とその後の『明史』編纂は、清王朝が漢族の文人を懐柔あるいは統制するために次々に展開した大規模な図書編纂事業の端緒とも言えるものであるが、こうして都に文人が集まったことにより、『楽府補題』に唱和する「擬補題」活動が広まった。宋末元初の詞人たちの思いを、明末清初の詞人はどのように受けとめ、発展させようとしたのか。

詞は中国文学史では、しばしば「宴席で作られた端唄のようなもの」と記述されているが、王朝が交代する動乱の時期には、心情を率直にうたう詞の特徴が、このように政治的な傾斜を見せることがあるらしい。元明代に一度は衰退した詞が、明末清初に再興する時、『楽府補題』の発見や「擬補題」活動もどのように関わったのか、あるいは関わらなかったのか、それは今後の課題としたい。

注

- (1) 萩原正樹「王沂孫の詠物詞について」、『学林』四、一九八四年、七八〜九四頁。
- (2) 松尾肇子「宋末元初の詠物詩——『詞源』を中心に」、『岐阜経済大学論集』三十二(一)、一九九八年、一〇一〜一二四頁。後に「詞論の成立と発展——張炎を中心として」、東方書店、二〇〇八年、に所収。
- (3) 王沂孫撰、呉則虞箋注『花外集』、上海古籍出版社、一九八八年。呉則虞の遺稿を後に整理して出版したもの。呉則虞の一九五八年の「前言」を付す。
- (4) 夏承燾「樂府補題考」、『唐宋詞人年譜』所収、上海古籍出版社、一九七九年。
- (5) 呉熊和「樂府補題」跋、『呉熊和詞学論集』所収、杭州大学出版社、一九九九年、一二三〜一二五頁。
- (6) 川合康三「蟬の詩に見る詩の転変」、『中国文学報』五十七号、一九九八年、二七〜五五ページ。
- (7) 清・朱祖謀「彊村叢書」本『樂府補題』の王樹榮の跋に指摘がある。
- (8) 元・陳旅『安雅堂集』の「陳行之墓誌銘」では編者を陳恕可(字は行之)とし、『千頃堂書目』には「仇遠『樂府補題』一卷」と著録されていて、夏承燾「樂府補題考」はこれを踏まえて、参加者の中で年齢の若かった二人が、分担して作品の整理に当たったのではないかとする。
- (9) 肖鵬『群体的選択——唐宋人詞選与詞人群体通論』、鳳凰出版社(もと江蘇古籍出版社)、二〇〇九年第二版、第七章第四節「托物言志的『樂府補題』」ではこれを「補題」体」詠物詞と呼んでいる。三七八〜三八二頁、参照。
- (10) 村上哲見「武民と遺民——宋末元初江南文人の亡国体験」『東北大学文学部研究年報』四十三号、一九九三年。のち、『中国文人論』(汲古書院、一九九四年)所収。『樂府補題』の詞会について、「杭州在住の文人十四人」とし、宋室の一族が崖山で全滅した「同じころ杭州において風雅な題詠の会を催していたのであるから、抵抗の精神云々を持ち出すのは、およそ見当違いといわねばならない」とするのは、従えない。場所は越州であり、宋朝の滅亡を尻目に「風

雅な題詠の会」を開いていたのではないと思う。

(11) 萩原正樹「王沂孫の詠物詞について」、七八頁、参照。

(12) 肖鵬『楽府補題』寄託発微——与夏承燾先生商榷、『文学遺産』、一九八五年第一期。肖鵬の研究に沿った『楽府補題』論に、丁放『金元詞学研究』（中国社会科学出版社、二〇〇二年）の第七章第二節『楽府補題』的接受与「比興寄托」說的演変」などがある。

(13) 孫康宜『楽府補題』中的象徴与託喻（『詞学』第十輯、一九九二年）は、冒頭に「十四名の南宋の詞人が陵墓盗掘の事件に発憤して五回の秘密の集会を持ち、『楽府補題』にまとめた」として、周密の作品を中心に、詠物詞にどのようなイメージが託されるのか論じている。

(14) 嚴迪昌『楽府補題与清初詞風』、『詞学』第八輯、一九九〇年、四一〜五九頁。また、嚴迪昌『清詞史』（江蘇古籍出版社、一九九九年）、第二章「朱彝尊与前期浙西詞派」。

(15) 張世斌「朱彝尊酬唱『楽府補題』詠物詞風格成因」、『武漢大学学报』第五十九卷第三期、二〇〇六年。

(16) 肖鵬『群体的選択——唐宋人詞選与詞人群体通論』、四五一〜四五三頁。

(17) 劉東海「從『楽府擬補題』創作看清初士人」、『史林』二〇〇八年第五期、七〇〜八〇頁。